

令和5年度

試験名:学群編入学試験

【社会・国際学群社会学類社会学主専攻】

区 分	標準的な解答例又は出題意図
専門科目	<p>貧困の社会学的研究において基本書のひとつとされるセルジュ・ポーガム著、川野英二・中條健志訳、『貧困の基本形態——社会的紐帯の社会学』（新泉社、2016年）から、ゲオルク・ジンメルを「貧困の社会学」の創始者として位置づけた箇所を抜粋した文章を出題に用いた。</p> <p>問1 社会学の実証研究のなかで、とくに質的分析において広く採用される方法としての（広義の）構築主義的アプローチに関する理解を問うた。ここではとくに、貧困の「自然主義的・実体論的な考え方」と対比した場合の、ジンメルの貧困へのアプローチの独自性が理解できているかを問うた。</p> <p>①単に量的比較のうえで相対的に貧しいという事実把握から貧困をとらえるのではなく（＝「自然主義的・実体論的な考え方」との対比）、②「貧しい」という事実以外のカテゴリー帰属が奪われる状態（＝社会的カテゴリーとして）に焦点化する、すなわち、③実際に扶助を受けるか、またはその社会学的状況からして扶助を受けるべき者として扱われる制度的形態をとおして、社会の内部ではじめて定義されるものとして（＝制度的な社会形態として）捉える、言い換えれば、（4）貧者の存在を認め援助する集合体に依存する状況にある事実をつうじて、社会の全体を有機的に構成する要素として（＝他の社会層との関係のネットワーク・布置連関として）把握するアプローチである、という諸点が適切に叙述できているかを基準に評価した。</p> <p>問2 本文中にもあるとおり、ジンメルが貧困を捉える構築主義的アプローチはアメリカの実証的な社会学研究において、さまざまな対象に外縁を拡張され応用されている。その段落の叙述も参考にして、自ら独自の対象を設定したうえで、このアプローチを援用した社会学的思考を展開することができるかを問うた。</p> <p>具体的に設定された対象に応じて解答例は変わりうるが、①社会の内部ではじめて定義されるものとして捉える、②成員間の相互作用をつうじてではなく、集合体＝カテゴリーとして社会全体と結ぶ関係のありように依存する、という2点を適切に踏まえられているかを基準に評価した。</p>
外国語	<p>社会調査法の入門書として広く参照されている、ローレンス・ニューマン『社会調査法：質的・量的アプローチ』から出題した。社会調査法は質的調査および量的調査に大別されるが、今回の出題では両者の相違点について、とくに研究の初段階で立てた問いをリサーチ・クエスチョンへと絞っていくプロセスに関して述べられている箇所を用いた。</p> <p>問1 最初に立てた問いはリサーチ・クエスチョンへと焦点を絞っていく必要があり、その方法は調査方法によって異なる、という文意・文章の運びが把握できている</p>

かを、下線部訳を問うことで尋ねた。

問 2

質的調査におけるリサーチ・クエスチョンとデータの関係性とは具体的にどのようなものかを、下線部の例から具体的に把握できているかを尋ねた。

問 3

下線部訳を問うことで、量的調査における問いおよび仮説の立て方とデータの関係性について理解できているかを尋ねた。

問 4

本文中で言及されているリサーチ・クエスチョンを例に、独立変数および従属変数について理解できているかを尋ねた。

問 5

問 1～3 のまとめとして、質的調査および量的調査の相違に関して、問いおよびリサーチ・クエスチョンとデータの関係性に着目して全文が適切に要約できているかという観点から評価した。